

日本語の再発見

ローマ字の欠陥

表音文字が“仮の借物”であって、「文字を創作するだけの力を有たない民族が、先進民族の文字を借りる時に行はれる“最も手軽な用法”である」といふことはすでに述べた所であるが、中でも、英語やドイツ語、フランス語におけるローマ字アルファベットほど欠陥の多い文字は、他に少ないと思ふ。

西欧の学者たちが、いかに自分たちの使つてゐる文字だとは言へ、このやうに欠陥の多い文字を優れた文字だと言ひ張るのには、よほどの厚顔無恥でなければ出来ない事だと、私には思はれるのである。

同じ表音文字であっても、わが国の“かな”は実に完璧だと言ってよい。日本語の有つ音韻を網羅してゐて、しかも余分な文字は一字もない。アルファベットにしても、フェニキヤ時代には今よりも少ない二十二字だったけれども、表音文字としては完璧であった。

フェニキヤのアルファベットは、三つの母韻と十九の子韻符号しか無かつたけれども、それは彼らの言語に必要な表音文字を選んで借りたからであつて、この二十二字でどんなフェニキヤ語でも立派に書き表すことが出来たのである。

然し、今のローマ字アルファベットでは、英語でもドイツ語でもフラン

ス語でも、彼らの有つ音韻の数に比べたら、ひどく足りない。母韻の数はいづれも十個以上あると言ふのに、母韻を表した文字は僅か五つしか無い。(それはラテン語には母韻が五つしか無かつたからである。日本語も母韻が五つなので、ローマ字は日本語を表すためには完璧だとは実に皮肉なことである)

このやうに文字がひどく足りないかと思ふと、その反対に、不要な文字がいくつかあるのである。“c”や“x”がこれである。“c”は今、固有の音価を有たない。“s”か“k”か、どちらかの音を受持つ。表音文字としては、“s”と“k”とあれば“c”は不要である。いや、不要と言ふよりも、“c”を使ふと“s”と発音するのか“k”と発音するのか迷はせるので有害である。

“x”は“ks”といふ二つの音韻を複合した音価を有つた文字である。二字に当るものを一字で表現できることには、それなりの便利さは勿論ある。然し、その考へ方を認めるなら、“ps”でも“bs”でも、複合出来るものはいくらでもあるではないか。(ギリシャ文字には“ps”があつた)“ks”だけが必要だといふ理由は無いであらう。

言ふまでもなく、“c”でも“x”でも、ラテン語を表すのには必要だつた。今、私が言ひたいのは、フェニキヤにおいても、ギリシャやローマにおいても、音韻文字を借り入れるに当つては、必要なものだけを借り、不

日本語の再発見

必要なものは借りなかった。そして、必要なのに無いものについては自分で作り新たにそれを組入れた。

ところが、イギリスやフランスやドイツなどの西欧諸国がローマ字アルファベットを取入れるに当っては、さういふ努力を全くせずに、そのままそっくり取入れた、その努力の無さ、無能さを指摘したいのである。

(と言って非難はしたが、実は無能でローマ字をそのままそっくり取入れたのではない事は私は百も承知である。それは「伝統を重んじた」からである。そのお蔭で、英・独・仏の言葉が互ひにあれだけ違っていても、同じ源泉のラテン文化を享受することが出来、それが相互の理解を可能にしてあるのである。例へば、アルバムの事を英語ではアルバム、仏語ではアルボム、独語ではアルブムと言ふけれども、綴りは“album”で同じであるから言葉の隔絶を防ぐことが出来てあるのである。それは、発音に関はらず“album”といふ古い伝統のある綴りを守ってゐるためである。もしも、発音を重視したら、古典であるラテン語とは途絶し、各国語間の隔絶はいよいよひどくなるであらう。だから、「ローマ字アルファベットをそのままそっくり取入れた」ことは“無能”だったからではなくて“賢明”だったからである。

然るに、西欧の言語学者たちは「文字は表意よりも表音が大切だ」とし、伝統の重要性を否定するから、それでは「ローマ字アルファベットをそ

のままそっくり取入れるのは無能だ」と言ふのである)